

アイルランド望郷

— アメリカ議会図書館所蔵ブロードサイド・バラッドを中心に

井 上 清 子

For tho' there's bread and work for all,
I would a great deal rather
Die in old Ireland once a week
Than live here altogether.

(" Lament of the Irish Gold Hunter ")

ここなら誰にもパンも仕事もあるけれど
ここでずっと生きるより
アイルランドに帰り着き
毎週一度死ぬ方がずっといい。

アイルランドはその長い歴史の中で、極めて多くの海外移住者を送出し続けた国である。移民は種々の事情によって故国を後にするが、アイルランドの場合、12世紀に開始され、その後750年余にわたるイングランド(イギリス)による侵略と支配がその最大の理由であると思われる。人々は、イギリスの支配下、産業の発展を阻止された国内で立ち行かなくなった生活の改善を求めて、自らの意志で、あるいは地主などの追い立ての故に、移民船に乗り海を越えた。

アイルランド人の国外流出は、特に1845年から数年に及んだ大飢饉の後、急激に速度を増し、海外移住が国民生活の常態となり、アイルランド文化の大きな構成要素となるに至っている。アイルランド人は世界各地に移住したが、中でも産業革命の途上にあったイギリス、後にはこれも拡張期にあった北アメリカ-イギリス領北アメリカ(カナダ)とアメリカ合衆国が移住先として選ばれた。特にアメリカは、自由平等の国、豊かな国、チャンスの地として移民が目指す第一の目的地となった。

生まれ育った故郷と慣れ親しんだ人々に別れ

を告げることは、たとえそれが自らの意志によるものであっても、移民にとって切実であり、他者の意図によって運命を支配される者にとっては哀感極まりないものがあったと思われる。更に危険を伴う航海の後、運良く目的地に着いたとしても、そこには、余所者として迎えられ、恐らくは無から生活の足場を築き、階層の上昇を果たすまで、数多くの試練が待っていた。

アイルランド人移民が様々な希望を胸に上陸したアメリカであれ、彼らがアイルランド系アメリカ人となり、最終的にアメリカ人となり得るまでその前途は果てなく、何世代をも要した。ことに言語や宗教も含め、拠って立つ文化が移住先のそれとは異質であった移民にとっては、社会に受け入れられ承認されるまでの過程は複雑であり、多大の苦難を伴ったであろう。

苦境と時には絶望の中であって、移民は、遠くにある故郷と別れて久しい人々を偲び、帰国と再会を夢見た。そのような彼らの心情の一端は、ブロードサイド・バラッドに作られ、大量に印刷されて安価に巷間に流布された。また、

それらは人の集まる至るところ—街頭、劇場、寄席、ミュージック・ホール、酒場、家庭などで歌われもした。そして、読む人に、あるいは聞く人に、様々な感慨を抱かせたと思われる。

I アイルランドと海外移住

イングランドによるアイルランド支配は、1155年ローマ法皇ハドリアヌス四世（Pope Adrian IV）が国王ヘンリー二世（Henry II）に、アイルランド領有を認めた（granted and donated）ことに端を発する¹。その後16世紀までイングランドのアイルランド支配は徐々に進んだが、宗教改革を経てローマ教会を離れ、イングランド国教会（Anglican Church）を樹立したヘンリー八世が1541年、ダブリン議会から「アイルランド国王」の称号を得たことにより加速的となった。更にエリザベス一世（Elizabeth I）の治世下、1595年から8年近くにわたるティロン伯（Earl of Tyrone）ヒュー・オニール（Hugh O'Neill）らの反乱が失敗に終り、イングランドはアイルランド全土にわたる支配権をほぼ確立した。

1610年代からイングランド人と低地スコットランド人によるアルスター（Ulster）地方植民が本格化し、植民に際しては先住のアイルランド人を西部に強制移住させる方法が取られた。元地に残存するアイルランド人は殆どが所有地を没収され、小作人として、移住して来た地主の支配下に組み込まれている。その後、1642年に始まる清教徒革命、更に1688年の名誉革命と、イングランドの国情が混乱するのに前後してアイルランドでは反乱が企てられた。しかしいずれも成功せず、その度に支配が強化された。

1649年のクロムウェル（Oliver Cromwell）によるアイルランド制圧は陰惨を極めた。彼は、反乱を企てた者の多くを処刑や追放処分にし、数百万エーカーの土地を没収している。名誉革命後に即位したウィリアム三世（William III）による1690年のアイルランド鎮圧は、以降の反乱の根をほぼ完全に断つことになった。その後100年近く、アイルランドにおいて大きな反乱が起こされることはなかった。

1695年に制定され、その後少しずつ規則を緩めながらも最終的に18世紀末まで持続された「異教徒刑罰法（Penal Code）」は、アイルランド人カトリック教徒の生活に多くの制約を加えた。同法は、イングランド国教会信徒以外の総てに向けて施行されたが、主な対象はアイルランド人の多数を占めるカトリック教徒であり、これによってアイルランドに、プロテスタント（イングランド国教会）教徒優位の社会が定着することになった。

アイルランドにおいて、カトリック教徒の大部分は、イングランド人やスコットランド人、更にはアイルランド人地主の所有地の小作人であった。中でも貧しい人々は、狭い小作地に主食となるジャガイモを栽培する生活を余儀なくされている。

17世紀の終り頃からアイルランドは、拡大するイギリス市場に組み込まれ、ために基幹産業である農業の構造に変化が生じた²。イギリスに輸出される家畜や酪農製品が高収入につながることから、牧畜農業が導入されたのである。地主は、牧畜に必要な広い土地を確保べく小作地を減らし、また地代の値上げを図った。折からの人口増加もあって小作地の需要は多く、小作人にとって借地することが極めて困難となった。また借地するだけの余裕もない農業労働者は、牧畜業が耕作農業程には集約的な労働力を必要としないため、失職する結果となった。

更に、1760年代から開始されたイギリス産業革命が進行する中で、アイルランドの小規模家内工業的であった亜麻や木綿を主とする繊維産業が、1820年代から急速に機械化の進むイギリス織物産業との競合に破れ、衰退した。ベルファスト（Belfast）を中心とするアルスター地方東部のみが機械化を達成したが、局地的なものに留まり、家内工業労働者の多くが職を失うことになった。

また1815年にはナポレオン戦争が終結し、ためにヨーロッパでは農産物価格が下落して、その状況は1840年頃まで続いた。よってアイルランドでも、商業化された、もしくは商業化されつつあった農業地帯が打撃を受け、小農や農業労働者の貧困化が進んだ。

最終的に、アイルランドに恐らくは産業革命

が起こらなかったと考えられ、地代の高騰、低所得や失職といった状況の下、生活の方策を求めて国内外に移住することは、アイルランドの人々にとって必要かつ将来性のある選択肢となった。

移住に際して、彼らが最初に目的地としたのはイギリスである³。従来からアイルランドの人々は季節労働者として、イギリスの農業地帯や土木工事現場に赴いていた。1798年のユナイテッド・アイリッシュメンの反乱の失敗の後、ダブリン議会の解散を経て1801年に自国が併合されたイギリスは、地理的に最も近く、彼らにとっては、いわば国内であった。イギリス産業革命の進展と同国の都市の拡張が続く中、1820年代にイギリスに向けての航路に蒸気船が導入され、渡航費が安価になったこともあって、イギリスに移住するアイルランド人の数が増加した。

移民への志向は、1830年代を通してアイルランドで強くなり、その間北東部及び南東部を手始めに、大量の人の移動が、アイルランド全土で全階層の人々によって一プロテスタント教徒・カトリック教徒を問わず行われるに至っている。1841年のイギリス国勢調査における（イングランド・ウェールズ・スコットランド在住の）アイルランド（で出生した）人の人口は、415,725人、1851年のそれでは727,326人、1861年には最多の805,717人を記録し、その後少しずつ減少に転じている⁴。ただ、イギリスに入国した移民の何割かは、最終的に北アメリカ、特にアメリカ合衆国に移住することを望んでおり、事実多くが再出国を果たしている。

1845年に発生し、その後数年に及んだじゃがいもの胴枯れ病に伴う飢饉は、アイルランド人の海外移住の様相を一変させた。1845年に850万人を超えていたと推定されるアイルランドの人口は、飢饉による死者や海外移住者の故に約200万人減少し、1851年には6,552,385人になっている。飢饉の影響は、主食をじゃがいもに依存していた西部の小作農民に最も大きく、最大の被害を受けたコナハト（Connacht）地方では、人口1,000人に対して40.4人の死者を出した。因みに全国の平均死者数は、人口1,000人に対して20-24人である⁵。

1846年夏のじゃがいもの収穫は全滅に近かった。その結果、アイルランド史上初めて「秋の大出国」が起き、何千人もの人が冬の大西洋を越えている。彼らは多くが貧しく、十分な食料もないまま吹雪の海を「棺桶船（coffin ship）」で渡り、飢饉の影響が最も大きかった1847年には、移民約5人に対して1人の割合で航海中死者が出ている⁶。

アイルランドから北アメリカへの移住は18世紀に本格的となり⁷、1700年から1775年のアメリカ独立戦争開始までに約100万人を数えた。その多くは「異教徒刑罰法」などを出国の理由とするアルスター地方のプロテスタント教徒（主に長老教会信徒 [Presbyterian]）であり、うち約20-25万人は、1717年から1776年までの間に、アルスターからニューヨークやフィラデルフィアに向かっている。1783年にアメリカが独立した後も、アルスターからアメリカに向けて移民が続き、以降30年間に約10-15万人に上った。

19世紀にも、プロテスタント教徒のイギリス並びに北アメリカへの移住は途切れることなく続いたが、1829年の「カトリック教徒解放令（Catholic Emancipation）」などを経てカトリック教徒移民が増大した。その数は、1840-50年代に大西洋航路に蒸気船が導入され、渡航費が安価になったことも併せて、飢饉以降空前のものとなった。1847年から1855年までの間に、約210万人—1851年までに約120万人、その後に約90万人が、アイルランドを出国したと推定される。移民の目的地は、アメリカが約140万人、イギリス領北アメリカ（カナダ）が約34万人、イギリスが約30万人であり、その他少数が主にオーストラリアに向かった⁸。そして1851年には、初めてアメリカのアイルランド（で出生した）人の人口が約962,000人と、イギリスのそれ、即ち約727,000人を抜いている⁹。

これら移住者の大多数は、労働者の階層に属し、従来アイルランド語（ゲール語）の話されていた地方出身の貧しいカトリック教徒であった。大西洋を越えての移住者は、当初アメリカよりイギリス領北アメリカに向かう者が多かった。渡航費がアメリカへのそれより安価であっ

たことに加え、イギリス政府の勧めがあったり、地主などによる渡航援助が得られることがあったからである。しかし20世紀中頃までカナダとアメリカの国境は往来が比較的自由であり、イギリス領北アメリカに入国したアイルランド人移民の幾分かは、そのまま国境を越えてアメリカに入国している。従ってイギリス領北アメリカ経由の移民を含めば、アメリカに入国したアイルランド人移民数は、現在推定されている数の1.5倍に上るとされる¹⁰。

アイルランド人移民は、イギリスにおいてもアメリカにおいても、都市に集中して居住する傾向が強かった。しかし彼らは雇用の見込める如何なる土地にも赴き、多様な職に就いた一季節収穫労働者、路上商人、運河や鉄道の建設労働者、港湾労働者、工場労働者、家事使用人などである¹¹。彼らは移住先で多くの試練に遭いながら、時には故国やそこに残して来た家族や友人を、時には自らの信仰を一カトリック教徒であれプロテスタント教徒であれ、拠りどころとして少しずつ地元社会に根を張り、階層の上昇に向けて歩み始めた。イギリスやアメリカといったプロテスタント教国に移住したカトリック教徒にとっては、移住先での負荷は殊更に大きかったと思われる。

アイルランド人移民とその子孫は、概ねイギリスにおいては19世紀の終わりから20世紀にかけて、アメリカにおいては第一次世界大戦から1920年代にかけて、新しい故国に馴染んで行ったようである。

II ブロードサイド・バラッド

(1) イギリスにおけるブロードサイド・バラッド

ブロードサイド・バラッド (broadside ballad) は、おおまかには「1枚の紙の片面に印刷された物語 (風の) 歌謡 (narrative song) もしくは詩歌 (verse)」と定義される¹²。印刷される内容は、時事 (問題) 的な性質のものが中心であり、それを報道するだけでなく、時に解説を加えたり論評したり、風刺することもある。ある意味で今日の新聞に近い。後代には叙情性の強いバラッドや感傷的なものも現われている。ブロードサイド・バラッドは、街頭で呼

び売りされることも多かった故に、ストリート・バラッド (street ballad) とも称されている。

印刷が安価に行われるようになると共に、この種の民衆文学は、イングランド (イギリス) のみならず広くヨーロッパ・アイルランド、オランダ、フランス、イタリア、スペイン、ドイツなどに普及した。イングランドにおいては、16世紀初めからブロードサイド・バラッドの印刷が行われ始め、同世紀中頃には相当量が流布されていたようである。その後ブロードサイド・バラッドは、どの時代にも印刷・出版が行われているが、特に17世紀後半と19世紀中頃に流行し、多様な内容のものが大量に世に出された。

16・17世紀のブロードサイド・バラッドの多くは、古いゴシック字体 (Black letter) で印刷され、タイトルの下によく木版画の挿し絵が置かれた。また詞句を囲むように、紙面に装飾的な縁取り (border) を施した例も見られる。紙面の一番最後には、印刷・出版業者の氏名と住所 (imprint) が印刷された。

18世紀以降ゴシック字体は使用されなくなり、代わってローマ字体 (Roman type; white letter) が使用されるようになっていく。また18世紀には、細長い紙片 (普通4.5×16インチ) に1編のバラッドのみを印刷することが多くなった。紙面の一番上に木版画の挿し絵を配し、次にタイトルと詞句、一番下に装飾的なこれも木版画の挿し絵を置く形式がほぼ定着した。同世紀のブロードサイド・バラッドの多くは、印刷・出版業者の氏名や住所が記載されていない。19世紀に出版されたものには、それらが記載されているものが多いが、また一方でそれらが印刷されていないものも多い。印刷・出版の年次は、ブロードサイド・バラッドの歴史を通して記載されることが殆どなかった。

19世紀のロンドンでは、50を超えるブロードサイド・バラッドの印刷・出版業者が営業しており、またアイルランドも含めてイギリスの総ての大きな町や都市にも多数の印刷・出版業者がいた。業者間では、所蔵する版 (version; text) の交換や売買、製品販売の提携が広く行われている。業者の多くは、ブロードサイド・バラッドのみならず、書籍、パンフレット、クリスマス・カードといったカード類、広告やち

らしなど多様なものを印刷しており、おもちゃ屋を兼業している例も見出される。

ブロードサイド・バラッドは、元から（読者によって）歌われることを想定せずに作られたようである。紙面に、バラッドがそれに合わせて歌われるべき曲名を指示している例はたびたび見られるが、殆どの場合旋律が掲載されていないからである。ブロードサイド・バラッドは、その販売が開始されて以降、伝統的に1枚1ペニー（小さいものは1枚半ペニー）で売られており、19世紀に至ってもその価格が維持されていた。故に貧しい人々にも極めて入手しやすいものであり、東の間の娯楽として19世紀の終わり位まで民衆に親しまれた。

ブロードサイド・バラッドは、粗悪な紙に粗雑に印刷されて消耗品に近く、過去に膨大な量が世に出されたのは確かであるが、現存するものは極めて少ない。従ってその全体像を把握することは不可能である。ただ過去に、ブロードサイド・バラッドに関心のある個人などによって相当な数が収集された例が見られる。

ブロードサイド・バラッドは当初、詩人、著作家、聖職者、宮廷人などによって匿名で書かれたが、程なく職業的なバラッド作者が出現し、彼らの手になるものが大半を占めるようになった。後代に劇場や寄席、ミュージック・ホールなどで歌われたり、後述するシート・ミュージック（sheet music）の形で出版された歌謡やバラッドが、ブロードサイド・バラッドとして転載された場合などは、紙面に作者や歌手の氏名が示されていることがあるが、原則的にブロードサイド・バラッドの作者は無名であり、特定することは不可能である。

（2）アメリカにおけるブロードサイド・バラッド

17世紀以降、イングランドのブロードサイド・バラッドは、移民、船員、兵士などによってアメリカに持ち込まれ、そこに印刷されているバラッドが現地で再版（reprint）されるようになった。また18・19世紀には、イングランドのバラッド印刷・出版業者が多数のブロードサイド・バラッドをアメリカに輸出している。同時期には、アメリカの業者もブロードサイド・バラッドを自ら印刷・出版するようになった。

アメリカでは、ブロードサイド・バラッドはソング・シート（song sheet）とも称されている。

やがて印刷・出版業者は、イギリス（主にイングランド）のブロードサイド・バラッドを転載したり、書き直して印刷することに加えて、イギリスやアイルランドの移民の口承から採録したものや、アメリカを舞台にした作品を印刷・出版するようになった。彼らは、自らの手で創作したり、あるいは職業的なバラッド作者や民衆詩人などに依頼して創作したバラッドを印刷している。

アメリカでは、19世紀初頭に蒸気機関を利用した印刷機が導入され、大量生産が可能になったことが、ブロードサイド・バラッドの大流行を招いた¹³。印刷には、詞句を浮き彫りにした金属板（plate）や彫版による挿し絵（engraved illustration）などの新しい技術が駆使され、種々のバラッドが大量に印刷されている。業者間では、金属板や挿し絵を売買することによって出版品目の増加が図られた。

19世紀中頃には、挿し絵に代わって、紙面に装飾的な枠（border）が施されるようになった。枠は木版に飾り彫りしたもので、どのような詞句の金属板にも殆ど利用できるように作られており、併せて印刷・出版業者の氏名と住所が彫られていることが多い。業者は、他の業者から入手した金属板に自らの枠を付けて印刷し出版することが可能となり、業者間の金属板の往来に拍車がかかった。

ブロードサイド・バラッドは、東の間の利用を前提に、安価で薄手の紙（普通6×8インチ）に印刷されることが多く、印刷の質も一般に悪かったが、安価に購入できるため、一般民衆の娯楽として1890年代位まで出版が行われたようである。

ブロードサイド・バラッドの流行と前後して、18世紀の終わりから19世紀の前半にかけて、アメリカの都市の中産階級を対象に、簡単な伴奏を付けた歌謡（歌詞）の印刷・出版が行われている¹⁴。シート・ミュージックと称されるこの出版物は、二つ折り版（folio）1枚もしくは2枚で25セントと高価であり、加えてピアノやオルガンなど伴奏用の楽器を必要とした。シート・ミュージックの類いは、18世紀の初頭、

イギリスでも流行し、ハーフ・シートと呼ばれている。

アメリカでは、ロンドンやヨーロッパから輸入されたりアメリカで作詞作曲された歌謡が、シート・ミュージックとして出版されたが、好評を得たものが(旋律抜きで)ブロードサイド・バラッドとして転載された例や、逆にブロードサイド・バラッドが旋律を付けられてシート・ミュージックとして出版された例がかなり見られる。因みに、イギリスの場合と同じくアメリカにおいても、ブロードサイド・バラッドの作者や出版年次は殆どが不明であり、特定することは不可能である。

(3) アイルランド人移民とブロードサイド・バラッド

イギリスにおいてもアメリカにおいても、口承のものも含めバラッドの伝播や流布に、アイルランド人移民が果たした役割は極めて大きいと言える。特に彼らが移民総数においてドイツ人に次ぐ集団となったアメリカにおいて、アイルランド人移住者の存在を抜きにバラッドを論じることは不可能であろう。彼らは、主流がイギリス系住民であるアメリカに、(18世紀以降英語で表現されるようになった¹⁵⁾アイルランドの多様かつ多数のバラッドをもたらしただけでなく、アメリカにおけるブロードサイド・バラッド産業市場の重要な構成要素となったからである¹⁶⁾。

彼らは、アイルランド人として入国した当初から、アイルランド系アメリカ人となり、更にアメリカ人となるべきその過程の総てにおいて、イギリス系アメリカ人の、そして時には同胞の、ブロードサイド・バラッド作者の視点から、バラッドに歌われる対象として、種々のテーマを提供し続け、またブロードサイド・バラッドの購入者(消費者)であり続けた¹⁷⁾。

1840年以降急増したアイルランド人移住者、中でも多数のカトリック教徒の存在は、アメリカ市民の注目を集め、ために彼らが好奇の目で見られたり、差別や偏見に晒されることも多かった。そのような人々にとって、(冷徹な目で見れば需要を見込んでとも受け取れるが)故国アイルランドやアイルランドの人々をテーマ

とするブロードサイド・バラッドは—それがテーマを好意的に扱っていれば尚更に、加えて、それが安価で貧しい人々にも容易に入手できる故に、娯楽とも心の慰めともなり得たであろう。中でも、故国と懐かしい人々への追憶や思慕の情が歌われているバラッドは、移民の大きな共感を呼んだと思われる。

Ⅲ ブロードサイド・バラッドに見るアイルランド望郷

アメリカで過去に出版されたブロードサイド・バラッドは、残存するものが相当数、個人や大学図書館その他によって所蔵されていると考えられる¹⁸⁾。しかし、各バラッドの紙面や詞句の詳細までデジタル化されて広く公開されている例は多くはないようである。

本稿で考察するのは、アメリカ議会図書館所蔵のブロードサイド・バラッドである(“America Singing: Nineteenth-Century Song Sheets,” The Rare Book and Special Collections Division of the Library of Congress)¹⁹⁾。同図書館は、ブロードサイド・バラッドをソング・シートと称しているが、4,291枚所蔵しており、それらアメリカのバラッドの中に97枚のイギリスのブロードサイド・バラッドが含まれている。イギリスのものは、ロンドンとダブリンで出版されたものである。

所蔵されているバラッドの出版年代は、18世紀末から1880年代にわたるが、大部分は、アメリカでブロードサイド・バラッドが流行した1850年代から1870年代に属する。前述のように、アメリカのブロードサイド・バラッドは、イギリスやアイルランドのそれと深い関連を持つため、これもデジタル化され公開されているオックスフォード大学ボドレー図書館所蔵のブロードサイド・バラッド(“Bodleian Library Broadside Ballads,” Bodleian Library: University of Oxford)その他を援用した²⁰⁾。ボドレー図書館は、(重複するものもあるが)3万枚を超えるブロードサイド・バラッドを所蔵しており、その個々の詳細に加えて印刷・出版業者(printer)の推定営業年代(date)なども可能な限り付記したカタログを公開している。

アメリカ議会図書館所蔵のブロードサイド・バラッド（以下アメリカの版と略記）に関するキーワード検索において、「アイルランド（Ireland）」並びに「アイルランドの（Irish）」という語をタイトルや詞句に含むバラッドは各々 279 版、ゲール語に由来するアイルランドの古名「エリン（Erin）」に関しては 98 版、アイルランドの国花である「シャムロック（shamrock）」に関しては 38 版、アイルランドの別称である「エメラルド（の）島（Emerald Isle）」に関しては 88 版が、それに該当する。

キーワードが、1 版のバラッドの中に複数使われている例もあるが、上述のアメリカの版について各々の詞句を検討し、またボドレー図書館所蔵のブロードサイド・バラッドその他と対照した結果、アイルランド人移民が故国を偲ぶ望郷の念が歌われているバラッドは、14 版程見出される。このうち、イギリスやアイルランドでも出版されているブロードサイド・バラッド（“The Exile of Erin,” “The Irish Stranger” など）や、故国に残して来た恋人への思慕を通して望郷の思いに触れるもの（“Norah M’Shane,” “The Maid of Erin,” “I’ll Never Forget Thee, Dear Mary” など）は、今後の課題として本稿では省いた。

アイルランドへの望郷の念を語るブロードサイド・バラッドの概略（タイトル・出版業者・大意訳など）は、以下の通りである。

1. “Erin Is My Home” (Publisher: J.H. Johnson, Philadelphia; G.H. Harris, Philadelphia; Louis Bonsal, Baltimore) — 「私は多くの土地を放浪し (roamed)、多くの友に会い、イングランドでもアメリカでも幸せな時を過ごした。イングランドで生まれていたらその静かな岸辺を愛し、アメリカ (Columbia) で育っていたらその自由を讃えたことだろう。しかしいつもエリンに帰る日を夢に描いていた。もう放浪などしたくない。私の乗っている小さな帆船 (bark) をエリンの島に向けるのだ。エリンこそ私の故国 (home) なのだから。そこには勇気ある人々 (manly hearts) がいて、その心は雪のように清らかだ (pure as snow)。エリンでは、どこにも暖かさや陽気さが満ちている。」

ジョンソン (Johnson) とハリス (Harris) の出版した版は、各々 8 行連句 3 連 (stanza) で、枠も挿し絵も同じである。ボンサル (Bonsal) のものは 8 行連句 2 連で、前者の第 3 連が省かれた形になっている。ボンサルと同じ詞句のものは、ニューヨークでもアンドルーズ (J. Andrews) によって出版されている。各連の最後 2 行（大意訳の下線部）がリフレン (Oh, steer my bark for Erin’s Isle, / For Erin is my home) になっている。海外に流出したアイルランド人の寄る辺ない状況が、大海を漂う小さな船に巧みに例えられており、アイルランドは故国である故に、そこに帰ると強い意志が示されている。

このブロードサイド・バラッドの第 1-2 連とはほぼ同じ詞句に旋律を付けたもの (“Erin Is My Home - Ballad”) が、シート・ミュージックとしてフィラデルフィアで出版されており、歌い手の名が示されている故 (Sung by James G. Maeder)、舞台などで歌われ好評を得たバラッドであった可能性もある。シート・ミュージックの出版は 1834 年となっている²⁾。

2. “I Can’t Forget Old Erin Where the Grass Grows Green” (Publisher: unknown) — 「私の名はダニー・ブラック (Danny Black)、クレアの国 (country Clare) の生まれだ。今、御指名に従って故国 (home) と生地 (my own native land) を讃える歌を歌おう。私は微笑みを忘れず、色々な土地を巡ったが、私の心は常にエリンと共にある。あの青草の茂る国。私は生国 (my native country) を愛し、女王陛下にも忠実だ。しかし『懐かしいエリン (“Ould Erin”)』を忘れることなどできない。

貧しいアイルランド人 (poor Pat) はよく粗末な身なりに描かれるが、その心は暖かく、他所の人 (stranger) をいつも喜んで迎える。アイルランド人は愚行もするが、意地悪 (vicious) ではない。親のない子のためには金を、友のためには命を、文句なしに投げ出すのだ。だから愚行は寛大に見てほしい。エリンには気高い心の人々 (noble hearts) がいる。

これも大目に見てほしいが、アイルランド

人には純粋すぎるところもある。冗談好きで、あんまり冴えたものではないが機知 (wit) もある。エリンには情け深い心の人々 (feeling hearts) がいる。どこにいても、小さなエメラルド、海に輝くあのエメラルドを愛さないアイルランド人など一人もいない。明るい繁栄の光と穏やかな平和の中に、エリンに良き日が来るように。」

8行連句6連(第2連は4行、第6連は10行)の長いバラッドであり、各連の最後の行(大意訳の下線部)がリフレン(Where the grass grows green)になっている。このブロードサイド・バラッドは、ボドレー図書館などに、同じか、もしくは類似のタイトルや詞句のものが見出されないため、アメリカでのみ出版されたと考えられるブロードサイド・バラッドの項に入れたが、紙面の体裁などからイギリスまたはアイルランドで出版された可能性が極めて高い。ただ、このブロードサイド・バラッドのタイトルの一部("Where the Grass Grows Green")をそのままタイトルとするシート・ミュージックが、アメリカで1856-67年頃出版されており、これもアイルランド人の気質を肯定的に歌っている²⁾。

「女王陛下」がビクトリア女王(Queen Victoria, 1819-1901)であるか否かは不明であるが、「故国」と「生国」を区別するなど「私」の屈折した心理も伺われる。恐らく前者はアイルランド、そして後者はそれを併合したイギリスを指すのであろう。

詞句は、アイルランド人のステレオ・タイプ(PatはPaddyと並んで、アイルランド人カトリック教徒小作農民を暗示する)に加えて、これも型通りのアイルランド人の長所と短所を挙げている²⁾。概ねアイルランド人の気質を肯定的に捉えており、「私」が、人々にそれに対する理解と寛容を求めているのは、そのようなアイルランド人を認め、受け入れてほしいとの願いの故であろうかと思われる。

そして最後に「私」は、故国をエメラルドと呼び、今は苦難の中にあるアイルランドへの揺るぎない愛を語っている。

3. "I Love Thee Dear Erin" (Publisher: Horace Partridge, Boston) — 「エリンよ、私はお前

を愛する。その緑の岸で私も、私の愛するアニー(Annie)も生まれ育ったのだから。海を越えて来た中でアニーは一番美しい娘。私の幼い頃(in my childhood)、エリンの山や谷や妖精(fairies)が冬の夜話(winter-night tales)の話題になり、私には咲き乱れる花(blooming)が見えるような気がした。エリンには、赤子が眠る時それを護る天使がいるという。だから私とアニーの間に生まれたばかりのこの愛も大きく育つよう、きっと天使が護ってくれるだろう。エリンよ、私はお前を愛する。私の故国、私を育てた緑の島(green Isle that cradled mine own)、そしてアニーが生まれ育ったところ(The home of her childhood, the land of her birth)。私にとって地上の聖地(the most hallow'd of earth)。」

4行連句5連の比較的短いブロードサイド・バラッドである。ただ文脈はあまり整っておらず、状況が把握しにくい箇所がある。「私」と恋人が共に生まれ育ち、今は海の彼方にある故国での幼い頃の懐かしい思い出が語られる。

エリンは、山や谷が美しく花の咲き乱れるところ、妖精や天使が住むところ—そんな夜話が語られる国である。詞句の背後に、神話や伝説に富むケルトの世界を思わせるものがあり、それに呼応するかのようにエリンは「私」にとって最も神聖な土地であると結ばれている。

4. "My Good Ould Irish Home" Air — My Old Kentucky Home (Publisher: John L. Zieber, Philadelphia; J.H. Johnson, Philadelphia; Harris, Philadelphia) — 「私の心は今もお懐かしいアイルランドの家(my good ould Irish home)を恋慕う。嘆いてみても無駄なのに。放浪を始めた日から不運(bad luck)が続き、もう二度と故国(my counthry)を見ることもないだろう。小さな我家(my own little cabin)の扉が目につかび、思い出すと胸は悲しみで一杯になる。私の運命(fate)は哀れなもので(sad)、もう我家を見ることもないだろう。懐かしいアイルランドの家よ、さようなら(fare thee well)。*

もう慰めを言うのはやめておくれ、お願いだからやめておくれ。私の心は今も、帰るこ

とのないあの家のことを思うのだから。今は遠くにある、貧しいが幸せだったあの家のことを。

もう赤々と燃える火の傍らに腰を下ろすこともないだろうーじゃがいも (praties) がおいしそうに煮えていた。心を悲しみで一杯にして、疲れ果てるまで (till my limbs begin to tire) 嘆くのはもうやめにしよう。けれど家への思いは夢 (dhrame) のように私の心を訪れて、そっと私に囁くのだーパディ (Paddy)、後にしたあの家のことを忘れるな、二度と見る (behold) ことはないけれど。*

私の愛する国が自由になることはないだろう。それでも故国であることは変わらない。再びアイルランドが自由 (liberty) を得る日が来るかもしれず、その時 (thin) アイルランドはその名を誇りに思うだろう。しかし運命は定められていて、諦めるより術はない (must be resigned)。涙は目蓋に溢れるけれど、後にした家のために今一度祈りを捧げ (a few more prayers)、そして懐かしいアイルランドの家よ、さようなら。*」8行連句3連のバラッドで、各連の後(大意訳中の下線部が、*の箇所)にコーラス (chorus) (Thin spake no more of comfort; oh, spake no more I pray, / For my heart still turns to the home I've left behind / To my poor, but happy home far away.) が挿入されている。タイトルや旋律 (Air) の指示からも明らかのように、フォスター (Stephen Foster, 1826-64) が1853年に発表した「ケンタッキーの我家 ("My Old Kentucky Home")」の替え歌である²⁴。作詞者ジーバー (John Zieber) が「若きアイルランド人コメディアン兼ボーカル (バンド歌手) ガノン氏の持ち歌として (expressly for Mr. P.J. Gannon, the young Irish Comedian and Vocalist, and sung by him only)」作詞したとの注記がタイトルの下に施されている。従ってこのバラッドは、フォスターの原作のイメージを踏まえてミンストレル・ショー (minstrels) などの舞台上で歌われたのであろう。ジーバーは、ブロードサイド・バラッドの印刷・出版業者でもあったと思われる。彼が、当該のバラッド以外にも

(現存するものは僅かのようなのであるが) ブロードサイド・バラッドを出版しているからである。

このブロードサイド・バラッドは、フィラデルフィア以外の都市でも印刷・出版されており、ボドレー図書館にはニューヨークで出版された版 (Printer: J. Andrews) が所蔵されている。そしてその出版年代は、1860年頃と推定されている。

アメリカの版は総べて、印刷・出版業者の氏名や住所以外は枠も含めて同じである。ニューヨークで出版されたものは、タイトルの一部 (ould が old になっている) と枠が異なる。このバラッドは、フォスターの原作を巧みに利用しながら、各所に "ould, counthry, thin, dhrame" などのアイルランド訛り (brogue) を用い、洗練されない、歌い方や歌われる状況によってはコミカルともセンチメンタルともとれる仕上がりになっている。しかし、二度と見ることはない故郷の家への別れの言葉と、それでも断ち難い思慕の情は、存外に聞く人の心に強く訴えるものを持っているように思われる。

5. "My Heart's in Old Ireland" (Publisher: H. De Marsan, New York; J. Andrews, New York) — 「私の乗る小さな帆船は、大波を分けて堂々と進み、水夫の少年の歌う歌も快い。しかし私の胸 (bosom) は悲しみと苦悩 (wo) に満ちている。私がどこに行こうとも心はいつも故国にあるのだから。そこは、イタリアに咲く花よりも美しい赤い雛菊 (red-breasted daisies) やシャムロック、そしてサンザシや白い花が咲くところ。美しくは見えるが空ろで虚しい (cheerless and vain) 浜辺には、フランスの百合やスペインのオリーブが咲いている。

夏が去り、百合やバラが姿を消しても、シャムロックはなおも青々と、逆境 (in misfortune) にある友のように雪の上でも茂るのだ。ため息と共に誓うのは、もし故国に帰ったら、懐かしい生家 (dear native cottage) を離れて二度と放浪などしないということだ。そこではハーブが再び鳴り響き、酒杯 (goblet) は酒で満ち溢れるだろう。」5行連句5連で、各連の最後2行(大意訳

の下線部) がリフレーション (For my heart's in old Ireland wherever I go, / Oh, my heart's in old Ireland wherever I go) になっている。タイトルは、よく知られたスコットランド歌謡「我が心高原に ("My Heart's in the Highlands")」に由来するのであろう。

フランスやスペインに言及されている故に、「私」は(移住者でなく)船乗りともとれる。海上をさすらう「私」は、故国アイルランドを種々の花の咲くところと捉え、自らの心の拠りどころとしている。特に雪の上に茂るシャムロックを逆境にある友(恐らくは逆境にあるアイルランド)に例え、故国への強い信頼を重ね合わせているように思われる。

6. "I Think of Old Ireland Wherever I Go" Air — My Heart's in the Highlands (Publisher: H. De Marsan, New York; J. Andrews, New York) — 「私は、生まれた土地と見なれた懐かしい風景を遠く離れ、放浪者(wanderer)として美しいナイル川なども見た。しかし私がどこに行こうとも、いつも考えるのは懐かしいアイルランドのことだ。青い海の彼方の懐かしいアイルランド、勇者の国、野生のシャムロックの茂るところ、どこに行こうと考えるのはアイルランドのこと。

もうすぐ家に帰るのだ。私が一番愛するところ、西の彼方にある一番大切なエメラルドの島。今、私は野牛(wild buffalo)を追いかけているが、なおも故国の神(my country's God)に祈るのは、卑劣な敵サクソン人(base Saxon foe)が国境の外に追い払われることだ。故国は、シャムロックと甘く香る茨(sweet swelling briar)の咲くところ。尽きることのない幼年時代(childhood)の思い出—木の実を拾ったり、森や林を巡ったり、雛菊の咲く緑の野で遊んだり。

しかし私の哀れな放浪(my sad wanderings)はすぐ終り、心の拠りどころたるあの島を二度と離れることはないだろう。アイルランドの悲しみは深く、その苦悩は大きい、私がどこに行こうとも考えるのはアイルランドのことなのだ。」

4行連句9連で、第1連の後のみに(?)4行のコーラス(大意訳の下線部) (I think of old

Ireland, across the blue wave, / I think of old Ireland, the land of the brave. / 'Tis the home of the brave, where the wild shamrocks grow, / Oh, I think of old Ireland, wherever I go.) が入る長いバラッドである。作詞者が記されており(Written by J.H. Howard)、前述のスコットランド歌謡の旋律に合わせて歌うよう指示されている。このブロードサイド・バラッドは、ボストンでもパートリッジ(Horace Partridge)によって出版された。

「私」は、放浪者としてナイル川を見たこともあり、今は(アメリカで?)野牛を追いかけていると、スケールの大きな展開になっている。アイルランドで過ごした子供の頃の思い出の地やそこでの行動が、時に地名を交えて具体的に語られている。故に、聞き手(読者)—特にアイルランドを知る人には、恐らくはアイルランドが身近に感じ取れるであろう。故国は勇者の国であり、そこを蹂躪するサクソン人(イギリス人)の撤退を「故国の神」に祈るのは、カトリック教徒の祈りを思わせるものがある。

7. "Paddy's Lament" Air: "I'm Sitting on the Stile, &c." (Publisher: Charles Mangus, New York) — 「モリー(Molly)、私は葡萄弾(grape shot)²⁵を脚に受け、今柵に腰を下ろしているよ。痛みは激しく、身動きもできない。キリービッグ(Killybig)の家に(at home)、お前と一緒にいるのなら、友や牛や豚²⁶と一緒にいるのなら(Along wid all de spalpeens and de owld cow and de pig!)、どんなに幸せなことだろう。

オコンネル(Dan O'Connell)が生きていた頃は、アイルランド併合に反対して(for Repale)声を挙げ、アイルランド統一のために(of de UNION of owld Ireland)闘って敗北した²⁷。今アメリカの統一のために戦っているが、その報い(reward)は何だと思う? ふくら脛の葡萄弾だ。反乱軍(Rebels)は、哀れなアイルランド人(poor Paddy)に残忍で、もう松葉杖(crutches)なしには歩けないだろう。お前や豚のところに戻っても、もうジグ(Irish jig)も踊れない。

アイルランドにいて、お前と並んで腰を下ろし、そしてお前が花嫁で陽気で楽しかった

頃のように—そんなだったらどんなにいいだろう。故郷なら争い（scrimmage）だってシレイラ（shillelagh）1本で片がつく。ここでは銃剣（bayonets）に葡萄弾だ。

モリー、もう行くけれど、平和な時代が来たら、もう一度懐かしいアイルランドの浜辺を歩きたい。杖にすがってでも、お前とジグを踊りたい。牛や豚に囲まれて、二人はどんなに幸せだろう。」

4行連句5連のバラッドであるが、法律（Act of Congress）に従い、出版業者マンガス（Mangus）が1864年、ニューヨーク州南（部）連邦地方裁判所事務局（Clerk's Office of the District Court）に、このバラッドの著作権登録を行ったこと、及び作詞者名（By John Ross Dix）が記載されている。

歌うために指示されている旋律は、後述のバラッドにも適用されているが、人々によく知られたブロードサイド・バラッドの旋律である²⁸。そして、このバラッドの冒頭（Im sittin on de stile, Molly）も、アイルランド訛りを使っているが、上記のバラッドをまねて書かれている。またこのバラッドの紙面は、アメリカの版には珍しく、杵を付けずに挿し絵が用いられており、タイトルの上に、アイルランドの田舎家と思われる家を背景に、腰を下ろしている兵士と傍らに立つ女性が描かれている。

詞句から明らかなように、当該のバラッドは、南北戦争で連邦軍兵士として戦い、負傷したアイルランド人が、故国に残して来た妻に語りかける形をとっている。彼は、アイルランドでも祖国解放のために闘い、敗北して国を逃れたのであろうか。アイルランド訛りが多用されており、「私」が農民出身の兵士であることを思わせる。

南北戦争が勃発し、戦時のため不況となったアメリカでは、多くのアイルランド人移民の若者が、生きて行くために軍隊に入っている。またアイルランド人兵士の中には強制徴募された者も多く、彼らは移住先で互に敵と味方に分かれて戦った²⁹。祖国統一のためという大儀は、アイルランドの場合もアメリカの場合もいわば同じであるが、移住して程ない者—特に兵卒にとって戦争は過酷であり、大きな試練であった

と思われる。ただ、アイルランド人部隊として武勲をあげた例もあり、アイルランド人移住者の南北戦争従軍が、彼らがアメリカ社会に受け入れられるひとつの足掛かりになったことは確かである。

なおアメリカの版には、タイトルがこれと同じブロードサイド・バラッドがもう1版見られるが、内容は、アメリカにおける政治上の党派争いにアイルランド人の団結を呼びかけるものである。

8. "Lament of the Irish Gold Hunter" Tune—"I'm sittin' on the Stile, Mary" (Publisher: Horace Partridge, Boston; Andrews, New York) —「メアリー、私は今、遠く離れた鉱山（mines）の柵に腰を下ろしている。金の塊を見つけてはポケットに入れていく途中だよ。でも見つけたものはとても小さいし、数もほんの僅かだ。もう完全に参っているよ。」

ここではいろんなことが（lots of change）あった—私は変わっていないけれど。海を越えて来る時に、有り金は使い果たしてしまったし。人は、（選鉱用の）鍋と鶴嘴（pan and pick）だけあれば、ポケットは金で一杯になると言っただけ、そんなものではなかったよ。

お前がトランクに入れてくれた乾肉もソーセージも有難かった。今私は汗とほこりにまみれているよ（dirty）。雨が降らない限り、水はとても得にくくて、それに雨が降ったら降ったでびしょぬれだ。ここには傘などないし、屋根は雨漏りがするからね。濡れたら最後、風邪をひいたり咳がでる。

飲んで元気を出すようにと言ってくれた瓶詰めビール—気がついたら気が抜けてしまっていたけれど。船の戸棚に入れてくれた好意のチーズ—うじ虫が一杯わいて、どてつもなく大きい奴もいたけれど（filled chock full of animals, / And one a perfect whopper）。みんなとても有難かった。

もしも私に命があつて、その時が来てお前の許に帰るまで、どうか元気でいておくれ。ここなら誰にもパンも仕事もあるけれど、ここでずっと生きるより、アイルランドに帰り着き、毎週一度死ぬ方がずっといい。

行ける時には森に行く。ここはとてつもなく暑く、私はいつも汗まみれ。木も日陰もないからね。僅かな金しか見つからないけれど、いつも必死で捜しているよ。」

8行連句7連の長いバラッドである。これも、前掲のバラッドと同じ旋律に合わせて歌うよう指示されている。また冒頭も、そのバラッドをまねて書かれている。このブロードサイド・バラッドは、本稿で参照したバラッド集 (*Irish Emigrant Ballads and Songs*) に拠れば、フィラデルフィアなどで配布していた出版年次不明の歌集 (*The Exile of Erin's Songster*) にも掲載されていたようである。

恐らく1849年に始まるカリフォルニアのゴールド・ラッシュなどを踏まえて作られたのであろう。人の噂を真に受け、一獲千金を夢みたアイルランド人移住者が、(自分の成功して帰国するのを待っている) 妻か恋人に語りかける形で、移民船で海を渡り、金捜しに明け暮れる毎日の厳しさと辛さを詳細かつ具体的に述べている。

メアリーの色々な心遣いも今は遠い思い出に過ぎず、ひたすら金を捜す「私」にとって、アメリカは食と仕事に困らぬところではあるが、アイルランドは、たとえそこで毎週一度死ぬことになっても、帰りたい故国なのである。

*

上掲の8版のブロードサイド・バラッドは、アイルランドを離れた人々の故国への望郷の思いを歌うものである。それらは、種々の立場から種々の視点で望郷の念に言及している。語り手である「私」がどこにいるかは殆どの場合不明であるが、バラッドがアメリカの業者によって印刷され、アメリカで出版されていることを考えれば、読者は恐らくアメリカの民衆であり、アメリカという文脈の中で詞句を読むであろう。

従ってそれらのブロードサイド・バラッドは「アメリカに移住したアイルランドの人々」の故国に対する望郷の念と捉えることができる。しかし、彼らの移住先がアメリカでなかったとしても、本質的にそこに語られているのは、ア

イルランドを離れて海を越えた人々の故国への望郷の思いなのである。

上掲のバラッドを通して概観されるアイルランドとは、「(ゲール文化の流れを引く) エリン」、「海に輝くエメラルド」、「勇者の国」、「シャムロックが茂るところ」、「緑の野に花々の咲くところ」、「天使がいる地上の聖地」、そして「私が生まれ育った地」、「私の故国」である。総てのバラッドにほぼ共通して見出される語句は“(my) home”であり、アイルランドやエリンにたびたび添えられる形容詞は“old (ould)”である。

そのアイルランドが、今は「卑劣なサクソン人に蹂躪される国」となり、「繁栄と平和を奪われ」、「自由を失い」、「深い悲しみと苦悩の中」にあって、「独立のための闘いも敗北に」終わった。それ故「私」は、「海を越え」各地を放浪して歩く「放浪者」となっている。

しかし、「私」も含めてアイルランド人は、「貧しく」、「純粋すぎるところもあって愚行もする」し「冗談好き」だが、「気立ては良く」、「心は暖かく」て、「いつも他人を歓迎」し、「親のない子や友のためには惜しむことなく金銭や命を投げ出す」、そんな人々である。

そして、「私」のアイルランドでの生活は、「友や牛や豚に囲まれて」暮らし、「ジグを踊り」、「冬の夜は赤々と燃える火の傍ら」で、アイルランドの「山や谷や妖精のことが夜話に語られる」、そんな平穏で幸せなものであった。

今は失われた故国とそこでの生活、二度と会えないかもしれない家族や恋人、友人のことを考えると、「私」の胸は「悲しみで一杯」になり、目には「涙が溢れる。」そしていつか必ず「アイルランドに帰りたい」と思う。

19世紀から第1次世界大戦終了に至る1世紀余の(アメリカにおける)アイルランド大衆歌謡(*Irish popular song*)、即ち「アイルランドとアイルランドの人々にまつわる大衆向けの歌謡」、中でもシート・ミュージックとして出版された歌謡に大きな影響を与えたのは、アイルランド生まれの詩人ムーア(Thomas Moore)であったとされる³⁰。

ムーアは、1808-1834年に『アイルランドの調べ(*Irish Melodies*)』全10巻を出版した。

これは、アイルランドに伝統的に伝えられてきたハーブの旋律に、彼が歌詞を付けたものである。そしてその出版は、イギリスでもアメリカでも好評をもって迎えられた。

18世紀の終り頃、アイルランドではケルト文化復興運動が行われており、消滅しつつあったハーブの旋律の収集と記録もその一環として行われたものである。本来当該の旋律にはゲール語の歌詞が付いていたが、採録者であるバンティング（Edward Bunting）はそれを省いており、出版業者に乞われてムーアがそれらの旋律に付けたのは英語の歌詞であった。

ムーアは、ダブリンの中産階級カトリック教徒の家に生まれ、大学（Trinity College）でもギリシア語を学んでいて、ゲール語には殆ど関心を持たなかったようである。また彼自身も述べているように、アイルランドの民衆と接する機会も少なかった。従って彼は、アイルランドのケルト文化（ゲール文化）が拠って立つ言語や、その文化の流れを引く人々の生活を殆ど知らなかった。

しかしムーアは、生来音楽に対する鋭い耳を持っており、加えてアイルランドの歴史に思いを寄せるところが大きかった。彼の友人には、1798年のユナイテッド・アイリッシュメンの反乱に加わった者もあり、故国の命運を身近に感じる中で、彼の愛国の情は深かったとされる。

ムーアは自らの歌詞に合わせるため、ハーブの旋律の改変すら行っている。ただ、彼が書いた英語の歌詞には、彼が直観的に捉えたアイルランドとアイルランド人の本質ともいえるものが息づいていた。彼は、『アイルランドの調べ』に強い「郷愁（ノスタルジア）」の感覚を導入し、「今は失われた過去の幸せ」、「過ぎ去った時間」、「故郷を恋い慕う放浪者」といったモチーフの歌詞を書いている。更に彼はそれらの中で、「光と闇」、「喜びと悲しみ」といったものを巧みに対比させた。

ムーアが恐らくは直観的に歌詞の中に提示したのは、「今は失われたアイルランドの過去の栄光」と「それに対する郷愁」であって、それは取りもなおさずアイルランド人の心情に根ざすものであった。また彼は、歌詞の中で、アイルランドに古来の「エリン」という女性の人格

を定着させ、アイルランドの美しい自然を讃美し、更にアイルランドを象徴する「シャムロック」、「ハーブ」、「緑（という）色（彩）」などのイメージを確立させた。ムーアによって示されたこれらの概念やイメージは、上掲の8版のブロードサイド・バラッドにも強く投影されていると思われる。

19世紀に北アメリカに移住したアイルランド人に関して、ミラー（Kerby A. Miller）は、彼らが自らを「個人の力を超えた一特にイギリスと地主の圧力によって、故国を離れることを強いられた追放者（exile）」であると感じる傾向があり、それは「アイルランドのカトリック教に伝統的な世界観」に根ざすものであると述べている³¹。

アイルランドの古代の民間伝承（popular beliefs）に拠れば、大西洋の西（北アメリカの方角）には、死者が住む神秘的の島々（mythical isles）が横たわっているという。従って、北アメリカに向けての船出は死者の国への旅立ちを意味しており、そのためには死者を送る儀式が必要であった。アイルランドの、特にゲール語が根強く話されていた地方では、大飢饉の後、即ち19世紀の中頃から同世紀末まで、家族と別れて北アメリカに移住する者のために「通夜（American Wake）」が営まれている³²。

ミラーの指摘が、アイルランド人移民研究としてはカトリック教徒に重点を置いたものであるため、今日では反論も行われている³³。しかし、上掲のブロードサイド・バラッドの中に、自らの「不運」を嘆き、運命を「悲しいもの」と捉え、それを「諦観」をもって「受け入れよう」とする姿勢や、豊かなアメリカではあっても、そこでずっと生きるより「死んでも」故国アイルランドに「帰る方が良い」とする価値観が読み取れるのは確かである。

アイルランド人移民が、アメリカ人として、その存在を受け入れ側の社会からほぼ承認されるには、少なくとも20世紀を待たなければならなかった。従って宗派に関わりなく、彼らが自らを、故国を追われ放浪する者と感じることも少なくはなかったであろう。

アイルランドへの望郷の思いを歌うバラッドは、アイルランドの人々の、遠くゲール文化に

連なる伝統的な意識の流れに沿って書かれ、今は異郷にある移民達に、いつの日か帰るべきところを—それが死後であったとしても、指し示していたように思われる。

以上、簡単ではあるがアメリカ議会図書館所蔵のブロードサイド・バラッド（ソング・シート）を中心に、アイルランド人移民の故国への望郷の思いについて述べた。ブロードサイド・バラッドは、民衆の束の間の娯楽として消耗品に近く、現存するものは極めて少数である。従って、その少数の一部をもって、ひとつのテーマを論じることには難点もあり、更に多くの事例にあたることを今後の課題としたい。

ともあれ、アメリカのアイルランド人移民は、その殆どが故国に再び戻ることのなかった人々であるという³⁴。そのような人々にとって、バラッドに歌われているアイルランドは尚更に、手の届かぬ遠くにあって光輝くエメラルドに見えたであろうと考えられるのである。

[注]

1. アイルランド人の海外移住を論じる書は、総てがアイルランドの歴史に言及しているが、以下 Ulster を中心とする 15-18 世紀の歴史に関しては、Jonathan Bardon, *A Shorter Illustrated History of Ulster* (Belfast, 1996), pp. 43-92 に拠る。
2. アイルランドの農業などの産業構造の変化及びその結果に関しては、Donald M. MacRaild, *Irish Migrants in Modern Britain, 1750-1922* (Houndmills and London, 1999), pp. 13-14, pp. 23-25, pp. 28-29; Graham Davis, "The Irish in Britain, 1815-1939," in Andy Bielenberg (ed.), *The Irish Diaspora* (London, 1999), pp. 20-21 参照。
3. 以下アイルランド人のイギリス移住に関しては、MacRaild, *ibid.*, pp. 42-74; Davis, *ibid.*, pp. 19-36 に拠る。
4. Richard B. McCready, "Revising the Irish in Scotland: The Irish in Nineteenth- and Early Twentieth Century Scotland," in Bielenberg (ed.), *op. cit.*, p. 39, Table 2.1: Irish-born in Britain に拠る。
5. MacRaild, *op. cit.*, p. 32.
6. MacRaild, *op. cit.*, p. 33. アイルランドの大飢饉に関しては、Patrick O'Sullivan (ed.), *The Meaning of the Famine* (London and New York, 1997); Frank Neal, *Black'47: Britain and the Famine Irish* (Houndmills and London, 1998) などが詳細に論じている。
7. 以下アイルランドから北アメリカへの、主にプロテスタント教徒の移住に関しては、Donald Harman Akenson, "Irish Migration to North America, 1800-1920," in Bielenberg (ed.), *op. cit.*, pp. 117-18; Kerby A. Miller, "'Scotch-Irish', 'Black-Irish' and 'Real-Irish': Emigrants and Identities in the Old South," in Bielenberg (ed.), *op. cit.*, p. 144; MacRaild, *op. cit.*, pp. 101-2 参照。
8. MacRaild, *op. cit.*, p. 33.
9. MacRaild, *op. cit.*, p. 15.
10. Akenson, in Bielenberg (ed.), *op. cit.*, pp. 121-22.
11. Davis, in Bielenberg (ed.), *op. cit.*, p. 31; Ruth-Ann M. Harris, "Searching for Missing Friends in the Boston *Pilot* Newspaper, 1831-1863," in Bielenberg (ed.), *op. cit.*, p. 167.
12. 以下イギリスのブロードサイド・バラッドの詳細とアメリカへのそれらの伝播に関しては、G. Malcolm Laws, Jr., *American Balladry from British Broad-sides* (Philadelphia, 1957), Chapters I-III (pp. 1-83); Leslie Shepard, *The Broadside Ballad* (London, 1962), Chapters 3-4 (pp. 47-90); Leslie Shepard, *The History of Street Literature* (Newton Abbot, 1973) pp. 51-77 に拠る。
13. アメリカのブロードサイド・バラッドの略史、印刷法、形式（様式）などに関しては、本稿中に言及したアメリカ議会図書館の America Singing: Nineteenth-Century Song Sheets (<http://memory.loc.gov/ammem/amsshtml/ammssabt.html>) の解説、及び New York State Library の Manuscripts and Special Collections: Broadside Ballads Catalog (<http://www.nysl.nysed.gov/msscfa/broadsides.htm>) の Introduction に拠る。
14. 以下アメリカのシート・ミュージックに関しては、Jon W. Finson, *The Voices That Are Gone: Theme in Nineteenth-Century American Popular Song* (New York and Oxford, 1994), p. 8; William H. A. Williams, *'Twas Only an Irishman's Dream* (Urbana and Chicago, 1996), p. 5 に拠る。
15. John Holloway and Joan Black (eds.), *Later English Broadside Ballads*, 2 vols. (London,

- 1975-1979), Vol. I, p. 1.
16. Laws, *op. cit.*, p. 45, pp. 51-53.
17. Williams, *op. cit.*, pp. 3-4.
18. Robert L. Wright (ed.), *Irish Emigrant Ballads and Songs* (Bowling Green, Ohio, 1975), pp. v-vi は、ブロードサイド・バラッドの所蔵先として、アメリカのみならずアイルランド、北アイルランド、イングランド、スコットランド、ウェールズの大学図書館などを詳細に示している。
19. 注 13 を参照。
20. Bodleian Library に関しては、Bodleian Library Broadside Ballads (<http://www.bodley.ox.ac.uk/ballads/start.htm>) を参照した。他に、National Library of Scotland や Glasgow University Library も所蔵するブロードサイド・バラッドをデジタル化して公開している。これら以外に本稿においては、Laws, *op. cit.*; Wright, *op. cit.*; Holloway and Black, *op. cit.*; John Ashton, *Modern Street Ballads* (London, 1888); Robert Ford (ed.), *Vagabond Songs and Ballads of Scotland* (Paisley and London, 1899); Colm O Lochlainn, *Irish Street Ballads* (Dublin, 1939), and *More Irish Street Ballads* (Dublin, 1965); James Hepburn, *A Book of Scattered Leaves*, 2 vols. (London, 2000) を参照した。因みに、Wright, *op. cit.* には、本稿で論じたブロードサイド・バラッド “Erin Is My Home,” “My Good Ould Irish Home,” “I Think of Old Ireland Wherever I Go,” “Lament of the Irish Gold Hunter” が、各々 p.607, p.607, p.566, p.260 に、アメリカの版やボドレー図書館以外に、本稿で当該のバラッドの典拠として言及した事項と共に掲載されている。
21. Music for the Nation: American Sheet Music, The Library of Congress (<http://memory.loc.gov/cgi-bin/query/S?ammem/mussm:@OR>), Erin is my home ballad / by James G. Maeder 参照。
22. Williams, *op. cit.*, p. 106.
23. アイルランド人男性のステレオ・タイプとしての Paddy 及び Pat に関して、Williams, *op. cit.* 全体が、そのイメージの変遷を、アメリカの主にシート・ミュージックの考察を通して詳細に論じている。その中で、アイルランド人のステレオ・タイプ化された行動や気質については、同書 pp. 52-55, pp.105-6 を参照。また、Kathleen Donovan, “Good Old Pat: An Irish-American Stereotype in Decline,” in *Éire-Ireland*, 15.3 (1980), 6-14 は、アイルランド人のステレオ・タイプである Paddy のイメージが、アイルランド系アメリカ人の社会的・経済的地位が上昇するにつれて、1890 年代頃から少しずつアメリカ人の中で変化し始めたことを論じている。ただ、当該の論考においては、1875-1900 年代の「アイルランド系アメリカ人労働者」のステレオ・タイプとしての Paddy を対象としている。
24. Foster による歌謡自体に「失われた家（故郷）(lost home)」へのノスタルジアが強く流れているが、南北戦争以前に出版されたシート・ミュージック全般によく見られる傾向であり、またこれも Foster の歌謡に見られる「家（故郷）への思慕の情 (dream of home)」は、19世紀前半のヨーロッパ音楽全体 (musical milieu) を貫くテーマのひとつであったとされる。Williams, *op. cit.*, pp. 44-45 参照。
25. grape shot は、南北戦争時に大砲に使用された散弾の一種である。また jig は、普通 4 分の 3 拍子の jig という曲（旋律）に合わせて踊る軽快な踊りである。このブロードサイド・バラッドの中に、これも言及されている「シレイラ」は、リンボクや榎の木で作られた棍棒であって、曾てアイルランドの人々が種々の用途・杖、闘い、荷物を括りつけて運ぶなどに用いた。
26. 「豚」は、「泥造りの小屋 (mud cabin)」などと共に Paddy の貧しさを示すのによくバラッドや歌謡の詞句に用いられた。Williams, *op. cit.*, p. 62 参照。
27. Daniel O'Connell (1775-1847) が、カトリック教徒農民層を組織して起こした、1840 年から数年にわたるアイルランド併合撤回運動を指している。彼は、本稿で言及した「カトリック教徒解放令」成立に向けての運動には成功したが、このバラッドに語られている運動には失敗している。
28. アメリカでは “Irish Emigrant's Lament,” イギリスでは “The Irish Emigrant” のタイトルで出版されたブロードサイド・バラッドで、特にイギリスでは何度も印刷・出版されたようである。ボドレー図書館にはイギリス各地で出版された当該のバラッドが 18 版程所蔵されている。

る。そのバラッドの冒頭が、"I'm sitting on the stile, Mary,..." となっている。イギリスの版には、Author: Dufferin and Clandeboyne, Helen Selina Sheridan と記載されている。「アメリカに移住しようとする夫が、今は亡き妻と赤子の眠る教会墓地を見ながら、過去を偲び死者に別れを告げる」という内容である。このブロードサイド・バラッドは、アメリカで "The Irish Emigrant" というタイトルで、シート・ミュージックとしても 1845 年頃出版されている (Williams, *op. cit.*, p. 44 参照)。

29. Wright, *op. cit.*, pp. 11-12; Williams, *op. cit.*, pp. 113-17 参照。

30. 以下 Moore の *Irish Melodies* の本質と後代に与えた影響に関しては、Williams, *op. cit.*, pp. 19-29; Finson, *op. cit.*, p. 28; Georges Denis Zimmermann, *Songs of Irish Rebellion: Irish Political Street Ballads and Rebel Songs, 1780-1900*, 2nd Ed. (Dublin, 2002), pp. 76-78; Neil R. Grobman, "The Ballads of Thomas Moore's *Irish Melodies*," in *Southern Folklore Quarterly*, Vol. xxxvi, No. 2 (June, 1972), 103-4, 112-13 参照。

31. Kerby A. Miller, *Emigrants and Exiles* (Oxford and New York, 1985), in paperback, p. 556. Williams も上掲書 (p.105) において Miller の見解を支持している。

32. Miller は、*Emigrants and Exiles* の Conclusion において American Wake を詳細に論じている。同書、pp. 556-68 参照。アイルランド古来の民間伝承に関しては、同じく p. 557 参照。

33. Akenson, in Bielenberg (ed.), *op. cit.*, pp. 128-30.

34. 多くのアイルランド人移民が、後年故国を「訪問」することはあっても、「帰国(再定住)」することは少なかった。飢饉後にアメリカに移住したうち、10パーセント位の人が帰国したに留まっている。因みに、当時のアメリカにおいて、アイルランド人以外の民族集団に属する移民は、その約3分の1が帰国したという。更に、アメリカで出生したアイルランド人は、その殆どが帰国することはなかった。Williams, *op. cit.*, p. 227, p. 231 参照。なお Finson は前掲書 (pp. 285-87) において、1820-1840 年代のアイルランド人カトリック教徒移民の大流入が、多くがプロテスタント教徒であるアメリカ人の中に、

不安と反移民的姿勢を生み出し、ために大衆歌謡の作者に「アイルランド人移民はいつか故国に帰ることを望んでいる」という内容の歌詞を過渡的に書かせることになったと述べている。